

AI 社会担う次世代技術者とは

コンピューターや人工知能(AI)が社会に深く浸透する現在、情報技術を取り扱うエンジニアへの期待が高まっている。今年度情報工学部を新設し、全学でデータサイエンス教育を開始した名城大学は、朝日新聞社と大型教育フォーラム「朝日教育会議2022」を共催。「社会を創造する次世代の情報エンジニア」をテーマに、この分野の第一人者が語り合い、求められる情報エンジニア像について考えた。

【10月1日に開催。インターネットでライブ動画配信された】

プレゼンテーション

名城大学情報工学部学部長

佐川雄二さん



さがわ ゆうじ 名古屋大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。日立製作所、名古屋大学講師などを経て、名城大学理工学部情報工学科教授に就任。2017年から20年まで副学長。22年4月開設の情報工学部学部長を務める。

名城大学は2026年に迎える開学100周年のストーリーに「創造型実学」を掲げています。「Society (ソサエティ)5.0」(仮想空間と現実空間を高度に融合させる未来社会構想)にも表されるように、情報と社会の関わりがより深く、野の人の協働し、最先端の技

全学でデータサイエンス教育開始

基調講演

筑波大学デジタルネイチャー開発研究センター長 落合陽一さん

この10年を見ても、デジタル技術はとてつもない進化と拡大を遂げています。かつてマックス・ウェーバーという社会学者は、科学技術により世界は魔術から解放されたこと述べました。ナポレオンの時代、遠征に持参する瓶詰め飲料が腐らないのは、事前に神聖な火で熱して悪魔を追い出すからかと思っていたそうですが、科学の進歩でその原理がわかってきました。しかし近年は、世界の再魔術化が指摘されています。コンピューターやデジタルの進化によっ

デジタルの進化「無駄」が原動力に

表面には見えない課題や問題を発見する力を改めて大切にしたい。問題解決には新たなアプローチも必要です。矛盾の中にヒントがあることもあり、無駄に思えることがコンピューターサイエンスの次の原動力になり得る。「無駄」をせいにせずに活用していただきたい。

私の研究室では少し前、透明ディスプレイに字幕を表示し、両側から読める「シースルーキャプション」というシステムを作りました。相手のしぐさや表情も見え、耳が自由なメンバーとスムーズにコミュニケーションしたい。というのが開発動機でした。エンジニアには、こうした当事者意識が一番重要だと思います。モチベーションがなければ、新しい発想は生まれません。



おちあい・よういち 1987年生まれ。2015年東京大学大学院情報学府博士課程早期修了、博士(学際情報学)。その後、ピクシーダストテクノロジー株式会社を創業。計算機と自然が一体となった独自の自然観「デジタルネイチャー」を提唱し、17年、デジタルネイチャー推進戦略研究基盤を筑波大学内に設立。20年から現職。

パネルディスカッション



パネルディスカッションには、AIを活用したサービスを企業に提供する株式会社シナモンの山村萌さんを加えた3人が登壇。次世代の情報エンジニアの教育や求められる資質などについて議論した。(進行は伊木緑・朝日新聞社社部記者)



株式会社シナモン執行役員 山村萌さん

が論文を書くにも、簡単に書けるツールがあります。コンピュータのコードを書かずにも問題を解けることも増えています。これまでデータサイエンス人材と言えば、いわゆるエンジニアリングや数学の基本的な解を突き詰める人材のイメージがありがたかったが、斜めにずれてきたのかなと思っています。

やまむら・もえ 京都大学経済学部卒業後、メガバンクに入社し、ベンチャーを担当。2019年、株式会社シナモン入社。22年から執行役員。大企業とベンチャーでの経験を生かし、両者の連携やオープンイノベーションを推進している。

落合さん 社会への貢献を考え学んで

佐川 確かに人材像は大きく変わってきました。従来はエンジニアと現場の人が話をする時、文化の違いがなかなか会話にならないことが多かった。多くの人がコンピュータサイエンスの素養を身につけると一種の共通言語のようなものができます。ともに議論できる環境が求められているのではないのでしょうか。

山村 私たちのテーマはAIとの共生です。AIと聞くだけで、業務効率化がイメージされ、業務効率が上がりますが、本当にやるべきはその先で、企業や業界、社会の成長につながるものが本質だと考えています。

佐川 確かに、この分野に何が期待されているのでしょうか。佐川 確かに人材像は大きく変わってきました。従来はエンジニアと現場の人が話をする時、文化の違いがなかなか会話にならないことが多かった。多くの人がコンピュータサイエンスの素養を身につけると一種の共通言語のようなものができます。ともに議論できる環境が求められているのではないのでしょうか。

佐川さん 情報分野を超え興味深めて

佐川 私は先ほど協働力と表現しましたが、社会の問題が複雑化し、情報技術も高度化する中、現場の当事者とエンジニアの意識ギャップは大きくなるばかりです。双方が歩み寄り、まさに相互に臨場感をもって問題の本質を共有する姿勢が大事です。

山村 臨場感を持つことが大切だと感じています。当社エンジニアはベトナムや台湾出身者が多いのですが、彼らにはいわゆる文系出身の私のような人が何を考えているかわからないという状況が結構あります。相手の考え方や思いの引き出し方を少しでもわかるようにすることが臨場感を生み、相互に新しいものを生み出す力になると考えます。

山村さん エンジニアは臨場感が大切

佐川 実際に何が行われているかをイメージする力は全ての人に持って欲しい。AIに任せ終わるのではなく、他の解決方法があるかもしれないというところが少しも考えられれば、よりスマートな方法や新しい知見が出てくるかもしれない。

活用する側も理解深めたい

会議を終えて

同日で迎えた七回、〇〇の左越え二塁打と失策で無死一、三塁と——。4年前、朝日新聞社に高校野球の戦評を書くAI記者が仲間入りした。多くの記者が新人時代、半べそでノウハウをたたき込まれた10行の原稿を、たった1秒で書いてしまふらしい。

ここ数年、私を含む「非AI人材」がAIを話題にする時は「自分の仕事はそのうちAIに奪われるのではないか」「子どもをAIに負けないように育てるにはどうしたらいいのか」が中心だったように思う。

おびえる一方で、あれもこれもAIのできるのではないかと勝手に期待したり、「なあんだ、できないのか」とがっかりしたり。AIの仕組みをこれっぽっちも理解していない人が多いせいで、たくさんのすれ違いと誤解と無駄を生んできたのだろう。

名城大学では、文系を含むすべての学生がAIやデータサイエンスに関する授業を履修できるようにしたという。AIの開発を担うだけでなく、活用する側の人のAIに対する理解が進めば、新しいアイデアが出たり、深い議論ができるようになったりするだろう。

「く」をテーマに、来場者や視聴者と課題を共有し、解決策を模索します。概要と申し込みは特設サイト (https://aef.asahi.com/2022/) から。すべてのフォーラムで、インターネットによる動画配信をします(来場者募集の有無はフォーラムによって異なります)。共催大学は次の通りです。慶応義塾大学、成蹊大学、拓殖大学、千葉工業大学、東京理科大学、法政大学、名城大学、早稲田大学(50音順)

名城大学

1926年に開学した中部圏最大級の文理融合型総合大学。2022年、理工学部情報工学科を改組し、情報工学部を新設。同年、全学でデータサイエンス科目も開始。名古屋市内の三つのキャンパスに10学部と大学院を展開し、学生数は約1万5千人。実学重視のもと、データサイエンス・AIに関する研究も盛んに行っている。

8大学と朝日新聞社が協力し、社会が直面する様々な課題について考える連続フォーラムです。「教育の力で未来を切りひら

※本紙面は動画配信をもとに再構成しました。